291-92
1200501363938

農業教育研究會編

農業教育パンフレツト

東京帝國大學
助教授 青木誠四郎

實習指導に就いての心理的考察

2

成美堂書店

始

帝國圖書館藏

實習指導に就いての心理的考察

東京帝國大學
助教授 青木誠四郎

昭和九年 帝國圖書館藏

291-92

例言

革新さるべき今後の農業教育は、如何なる方圖と歩みをとるべきであらうか、農業本然の姿と、傳統の殼を脱した革められたる教育理念と、農業の眞使命に燃ゆる農士魂の陶冶錬成こそは、その主要なるものであらう。近時文部省が開設せる長期講習會は是等の見地に立つ今後の革新農業教育への最適施設であり、之を受講者のみにとゞめるには餘りに貴いものである。講義の速記を本とし講師の嚴密なる校正と補述を得たるものが、即ち本叢論である。全論を纏めて一冊ともしたが、又便宜を思ひ分冊して二十餘部とした。

農業教育研究會

實習指導に就いての心理的考察　目次

1　心理的に見た教授と實習……一
2　精神發達と實習訓練……一〇
3　青年期に於ける實習指導の心理的基礎……一四
4　青年期の身體並に體力……二六
5　青年期の理智性と實習指導の問題……三七
6　結　尾……四六

實習指導に就いての心理的考察

東京帝國大學助教授　青木誠四郎

1　心理學的に見た教授と實習

我々が教授と普通いつて居ることは、要するに我々が教ふべきであると思ふ知識體系を、子供と青年とかいふやうな、所謂發達期にある者の心身の生活體系の中に織り込んで、さうして其の全體の生活を作つて行くといふことにあると思ふのである。併し我々が現在やつて居るやうな教授が、さう云ふ風に行はれて居るのであらうか、即ち我々が教へて居ることが、子供や青年の生活の中にしつかりと組込まれて、どういふ場合にも確實にそれが現はれて來るといふやうな狀態になつてゐるかどうか考へて見ると、多くの疑を其處に持たないでは居られないのである。

今日の學校の教授といふものでは、用ひられて居る教授の素材が、發達した學問の知識體系を略々其の儘うけついで居る所が多いのである。譬へば日本歴史といふやうなものを、小學校の下級に於て授ける日本歴史と、上級に於て授ける日本歴史と、中學校の日本歴史、中學校の上級の日本歴史、或は高等學校の日本歴史を比べて見ると、其の間にさう大して違ひがないのである。從つて我々が小學校をやり、中學校をやり、高等學校をやるといふやうな事になると、同じやうな日本の歴史を繰返してやることに實際なつて居るのである。勿論上の方の學校で授ける知識體系は、整備された知識體系で宜しいのであるが、それが其の儘下の所に入れられて來るところに問題がある譯である。動物學の知識とか、或は植物學の知識といふやうなものでも、小學校で教へて居る動物學と農業學校で教へて居る動物學といふものがどれ程違ふかといふことになると疑はしいものが多い。

抑もかやうな學問の知識體系といふものは、學問の研究の進んだ狀態に於て、所謂形式が整へられた學問の論理的な體系が整へられて完全なる型を持つて居るわけである。是は最も整備されたる學問の現在のトップを行つて居るものである。所がさういふものは、非常に整備されたものである。

併し、それを教へられる子供、或は、青年――教育を受ける者を見ると、さういふ者の精神の狀

態は、もつと遙かに素朴なものなのである。良く言ふやうに、未開の狀態に居るのであつて、其の興味として考へて居るやうなことであつても、見たい、聞きたい、知りたいと思つて居るやうな事であつても、かなり素朴なものであり、整備された學問の體系と云ふものとはかなり違つたものを持つて居るのである。そこで勢の自然として、我々は素朴なる子供の精神の狀態、或は素朴なる青年の精神の狀態が欲してゐない整備されたものを注込んで行かなければならぬといふやうな關係になる。いはば、レディーメイドを無理に着せる、といふやうなものである。其處で自然として學校でやるやうなことと、子供自身の生活、青年自身の生活といふものが、そこで分離して來ることになると思ふのである。詰り學校でやることは、教科書にあることをやる。試驗の爲にやるといふ考が出來る。子供の生活はあるけれども、學校では學校のことをやる。教科書で教はつたことは、教科書で教はつたことである。之を極端にいふと、胡瓜の栽培といふやうなことであれば、教科書の何頁にあるといふことは考へるけれども、自分の家の畑の胡瓜をどうすべきかは思ひ出さぬといふやうな教育をして居る譯である。小學校の子供は、櫻といへば、櫻の花は五辨あるといふことは言ふけれども、それは美しいとか、どうして大きくなるかといふやうなことは、考へないのである。

實際我々がものを教はつた經驗からいつても、極めて無味乾燥なことを學校では教へてくれる。子供の生活は別の所にあるといふ譯である。

さういふ風であるから、子供は自分から活動して自分の求めてゐることを實際に試み、實際にためして行くやうな、さういふ生活を學校ではしてゐないのである。いひ換へれば、彼等は生活する知識を授けられて居ないといふやうな狀態になつて居る。綴方をやつても、手紙を書かうとしない、植物學をやつても、庭の木に水をやり、肥料をやり、蟲を取るといふことはしないのである。結局普通植物、綴方といふことは、學校の教科書にあることで、庭の木は別である。さういふやうな分裂した學習が行はれて居るのが、實狀ではないかと思ふ。換言すれば、子供や青年は眞の生活をしない。約言すれば彼等は考へず、生活せず、經驗しない知識を教へられて居るといふことになつて居ると思ふ。知識教授といふものは、前述のやうに、教ふべき知識其者が、心身の生活全體の中に織り込まれるといふのが目的であるからして、かういふ風に考へて見ると、今日の教授といふものの大部分は、實際に教授してゐないと言はなくてはならぬのではないかと思ふのである。

我々はどうしても生活する知識を授けなくてはならぬといふことになると思ふ。

玆で所謂實業學校の教育といふものに就いて反省して見ると、今日の農業學校の教授も恐らく多分に此の趣がありはしないかと思ふ。即ち教場で學ぶことは教場で學ぶことである。家の生活は家の生活と別々に之を考へるといふやうな風になつて居るといふ趣がある。教場で學んだことは、いはば孤立した何も關係のない知識體系といふものになつて居つて、それは試驗の爲の知識であり、或は教科書の知識であつて、體驗された知識がないといふやうな趣が非常に強いのであるまいか。かういふ場合に當つて、是等の生徒に、是等の知識體系を眞に經驗された知識とし、眞に生活された知識とするやうな、大きい任務をもつたものが實驗並びに實習であらうと思ふ。殊に農業學校のやうな、實際の生產に就いての知識を教へるやうな場合には、實習に凡てのものが結び付かなくてはならぬといふことは、常に考へられなくてはならぬと思ふ。譬へば博物學の知識は、顯微鏡を通して頭に映じて行くことがある。併し顯微鏡に映つた博物學の知識が、それだけで止まつてゐてはいけないのであつて、其の知識は同時に植物の生活といふものに直接に結付いていかなくてはならぬことは申す迄もない。換言すれば、我々が顯微鏡を通して見るには、植物の生活を理解するといふ所へ結び付いて行かなくてはならないし、植物の生活を理解するといふことにならなければ、同

時に育つてゐる植物の生活に理解を持つといふことにならないのである。生産とか、生活といふやうな仕事に關係して行かなければ、本當の今の顯微鏡に出て來た知識は何にもなるものではないと思ふ。大學研究室で、植物の細胞はどんな形をして居るかといふことを實險して居る人の知識とは違ふのである。時にはともすると大學を卒業したばかりの人は、大學で使つたノートを持つて來て掲げる。生徒はさつぱり分らない爲にあれが大學の本だといつて喜んで居るといふやうなことではいけない。一つのことをやつても、それが軈て生産の仕事といふものに結び付いて行かなければならぬ。

例へば蔬菜とか、病蟲害といふやうなことを敎へるに際しても、それが如何に植物の生育、或は生産といふ一つの生活の體系の中に織込まれ、又如何に農場の實際の經驗を指導してゆくかといふことが、考へられつゝ敎へられなくてはならないのである。

私はかやうな實際に人間の體驗すべき生活といふものに、凡てのものが消化され、吸收されなかつたならば、恐らく何等我々の知識は役に立つものではないだらうと思ふ。換言すれば、我々は職業生活を通じて、其處に初めて我々の生活を實現する途があるのであるから、其の職業生活なり生

産なりに、凡ての學問なり、凡ての敎育上の知識の敎授といふものが結付いて行くやうな狀態でないならば、私は實際には何にもなつてゐないのではないかと思ふ。

良く畑を耕すのは、學問とは別だと云ふ人があるけれども、それは二重生活の甚しいものであつて、それは本當の生活ではないだらうと思ふ。畑を耕すことに詩があり、科學があり、人生がなければ、本當の農業者とはいひ得るものではないと思ふ。さういふ意味に於て、凡ての知識といふものは、實習に於て最後の實を結ぶ。實習に於て凡てのものが綜合されて、一體になるといふやうにならなくてはならないのであらう。生徒は農學校に於ける生活とは、實習に於て本當の生活をすることが出來るのであつて、實習は其の意味に於て、最も中心的なものである。學問はそれを準備する爲に行はれて居るものである。農場に於てそれが體驗され、經驗されて初めて敎授は生物であるといふやうに言はなくてはならないのであらうと思ふ。

そんなことをして居ると幾らも敎へることが出來ないといふやうにいはれる方があるだらうと思ふが、今日の學校で敎へる知識は、實際に我々は非常に多いことを憂るのであるけれども、少いを憂へるといふ狀態には全然ないのである。我々は唯だら〳〵と種々な知識を授けて行くのであるけ

れども、寧ろさういふやうな澤山の知識を敎へるといふやうな事よりも、少いもの本當に必要なものさうして中心になるものをみつちりと頭に入れて、それを體驗として心に取入れて行くといふことが大切であつて、それが出來さへすれば其の外の種々な敎授は、殆ど重要視しないでも自然に頭に分つて行く事になる。自然に自分の工夫といふものは行はれると云ふことになると思ふ。體驗のない敎育といふか、頭ばかり使つて敎育するといふものは、子供の時代に行はれて居ると青年時代になつて、非常な精神的動搖の一つの原因になるといはれて居る。アメリカのブルック氏、イギリスのストラング氏等は、一般に青年期の動搖といふものが、少年時代の經驗の貧弱といふことに、非常に大きい責任を持たなくてはならないといふことをいつてゐる。經驗の貧弱といふことは、要するに頭ばかり使つて、本當に自分で知識を經驗しないことなのである。自分の腕を動かし、手足を働かして見ない生活を青年期になるまで行つて居ると、青年時代に種々な動搖が來る原因になるといつて居るが、それはそれとして、兎角しつかりと自分の生活に組入れて行くといふことになれば知識の少いといふことは筆者は決して怖るに足る事ではないと思ふ。要するに敎育と實習との關係といふものを、斯く心理學的に考へるならば、實習は敎育の王座を占めるといふことになるべき

性質のものであつて、さういふ考へ方を除いては、此の農學校の敎育は意味をなし難いものであらうと考へられるのである。

2　精神發達と實習訓練

私はかやうな意味に於て、實習といふものを、凡ゆる教授の綜合、凡ゆる教授の頂點として考へたいのであるが、此の種の實習といふことは、要するに身體的な勞作といふものを意味する。換言すれば、勞働を意味するのである。所で此の勞働と云ふことは思ひ立つた時にそれに應じて直ぐやつて行くことが出來ると云ふ性質のものではない。實際に例を見れば分るやうに、中學校等を卒業して、商店等に雇はれるか、或は農業をするといふやうな場合には、特別な場合でない限りは容易にやらないのである。運動のやうなものであつても、二十歳以後になつて野球を始める等は却々やれるものではない。第一億劫で出來ないといふ。其の億劫であるといふことは、意義があると思ふ。詰り其の時に應じて何時でもやらうと思へばやれるといふやうな性質のものではないのである。或は又中年になつて勞働をしなくてはならぬやうな境遇になると、中々勞働に耐へて、生活をして行くことが出來るやうな人を見ることが少い。それと反對に、子供の時にしつかり働いた人といふものは、大人になると何かやらなければいけないといふやうな氣持をもつやうになるだらうと思ふ。

今のやうな中年にして、勞働に從事すると中々旨く行かないとか、或は反對に子供の時に良く働いた人は、樂をしてゐると何となくだるいといふやうなことは、それが相當に意義のあることではないかと思ふのである。

此の勞働といふものは、筋肉の運動であるが、筋肉の運動といふものは、一方では運動を始終致すると、筋肉の發達を招來することになるのである。同時に體力が發達して來るやうになる譯である。それから一方では筋肉を使用することによつて、一つの使用する傾向といふものが出來上つて來る。筋肉を初めから使はないやうな人には、此の使用しない筋肉を、後になつて使用するといふ傾向を付けることは、非常に困難なものである。詰り筋肉は使用によつて能力を發揮し、其の傾向を、言ひ換へれば、習慣を養つて來る性質を持つて居る譯である。さう云ふ筋肉の發達と、使用とによつて生ずる使用の傾向、或は習慣は、何時でも我々に付け得るものではないのである。此の習慣或は能力は、要するに筋肉の發達期に於て行はるべき性質を持つて居る。成人のやうに成熟してしまつてから筋肉の使用をしなくてはならぬやうになつても、容易に發達し得るものではない。

是は後にも述べるが、一體筋肉の發達する時期は、大體に於て兒童期と青年期とであるといふこ

とが出來る。

兒童期とは六歳から十四五歳までで、十四五から二十三歳位迄を青年期といふ。(女の子供は少し早い) 其の中で六七歳頃から十八歳迄の間に筋肉の發達といふものは行はれるのであるから、此の時代に筋肉を使用し、筋肉の發達と使用の傾向の發達を企てなければならぬ。其の後になつて勞働の習慣を馴致しようとすることは、先づ困難なのである。

此の兒童期では、其の精神發達の關係から、或は筋肉の發達によつて、或は體力の發達によつて、比較的單純に勞働の馴致をすることが出來るのであるが、青年期になると、單純に筋肉の發達からのみ考へて、筋肉の使用を馴致するといふやうなことが出來ないのである。即ち外に一つの考慮しなくてはならぬ點があるのである。それは自我の發達である。

即ち兒童に於ける實習指導には、可成單純なことでも可成機械的なことでも、それが一方では單純な精神の結果と合致するものがあるし、一方では自分といふ氣が直接ないのであるからして、此の方が命令することによつて練習が續けられるといふ特徴がある譯であつて、それによつて長くやれば勞働の習慣を培ふことも出來るし、從つて子供の實習指導といふことはさう大して骨の折れる

ことではないのである。子供といふのは良く命令を守り、一生懸命にやるのであつて、そこで長く練習さへすれば、或はそれを長く續けさへすれば、子供は勞働の生活に入つて行くことが出來るのである。農學校であると、入つたばかりの子供は、兒童期に居るから、多少やりにくい點があるけれども、兎角此の方で命令をしてやれば子供はちやんと動くことがあるのである。所が三年制の甲種の農學校あたりになると青年期になつて居るのであるから、實習をやらなくてはならぬといふ考はあるが、何かかんか文句を言つて見ないとすまないといふ傾向が出て來るわけである。それが青年期の傾向であつて、生意氣なことを言つたり、自分でやらうとしない、人を牛や馬と心得てゐるといふやうなことをいふ。それがつまり教育なのであるけれども、教育を受けようと云ふことが、其處に自我といふものが發達して來て居るから、中々それを眞正面から受入れて行くといふ風なことの出來ないやうな狀態になつて居るのである。其處に青年期の實習指導といふものに、多くの工夫が必要になつて來るのである。

3　青年期に於ける實習指導の心理的基礎

私は實習の意味及び其の精神發達との關係を、上述の如くに考へるのであるが、次には實習指導の基礎的な考慮として、青年期の生活について考へて見たいと思ふ。

前述のやうに青年期とは、男では大體十四五歳頃から二十三歳位迄、女では十三四から二十歳位迄、結局中等學校の三年位から大學を卒業する位迄の年齢、女でいへば女學校の最初の級位から女學校卒業後一二年が、其の時期に當るのである。此の時期には色々な精神的な變化の來る時であつて、大人とも異なり或は子供とも異なつてゐて、往々に取扱ふことがむづかしい問題を持つて居るのである。是は青年期に著しい精神的變化があるからである。其の精神的な變化については學者によると、漸次にやつて來るものであるといふ風にいつてゐる人もあるが、多くの學者は此の變化が、其の時代になつて急激に現はれて來るといつてゐる。どういふやうな變化が其の時代になつて現はれるかといふと、それにも色々な説があるのであるが、August Broner は、それを分けて、六つ位の性質を擧げて居る。一つは感情の不安定である。もう一つは開放を要求する。只解放されることに

對する悦びがあるといふことである。それから三番目には、新しい經驗を求めることである。新規なるものを要求するといつても宜い。新しく流言る言葉を最初に傳へるのが青年である。一寸珍しいと直ぐ使ふ。我々が知る時分には廢れてゐるのであるけれども、遲れ馳せながら知るといふやうなことになる。青年は兎に角發明したり使つたりするのである。四番目には自我感情の强くなること。是は後に詳述する。それから空想的な傾向が强くなり、其の通りに物事が進んで行くものの如く考へるといふやうな性質がある。田舍の娘が東京へやつて來て蒲田へ行くと、直にスターになれると思つて飛んで來るといふやうな心持である。それからもう一つは性的な傾向である。是は青年としてはいふ迄もないことなのであつて、以上のやうな六つの傾向を擧げて居る。併し是は或る一人の人が言つてゐるといふことに止まるのであつて、種々な考へ方がある。

獨逸の Spranger の言つてることを見ると、第一に自我の發生、第二に生活の計畫を立てること、詰り理想の發生、もう一つは人間が特有な生活の圏内に這入り込むこと、是等が青年期の傾向であると言つて居る。

かういふやうな種々な學者の説を擧げると際限のない程であるが、かう云ふやうな性質はもう少

し根本的な、基礎的な性質に歸することが出來るやうに思ふのである。私は Buhler の考と略々同様である。第一は理智性で、次は感情性である。それからもう一つが性的な傾向、此の三つが青年期の時代の基本的な特徴であつて、前述のやうな具體的な性質は、是等三つの根本的な性質或は基本的な性質から説明が付くものではないかと思ふのである。

Spranger 等が論じて居る理想の發生といふやうなことは、要するに理智的な傾向が其の原因になつて理智の働きが出來て來ると、理想が其處から生れて來るやうな傾向を取るやうになるのである。結局具體的な青年の生活は、大體此の三つの特徴から考へて見ることが出來るやうに思ふのである。それで青年の一般の生活の指導、勿論實習の指導といふやうな事でもさうであるが、一般として是等の性質に就いて考へて、其の上に築かれるものでなくてはならないと思ふのである。さうでないと我々が思つて居るやうな結果を擧げることが出來ない。例へば先生の中には、生徒に對して喧しく叱事をいふ人がある。勿論其の心情は我々に直ぐ理解することの出來るものである。つまり子供のことを思つて、世話をやくのであるけれども、餘り世話をやくといふ先生は、生徒が馬鹿にするのである。さういふやうなことになれば先生はいくら一生懸命になつたつて、何にも役に立たない。

生徒は段々さういふことをして、人を小馬鹿にするやうになるといふことだけである。さういふやうなものは、青年の心情に則してゐない教育の方法を取つて居るといふべきである要するに我々は青年の一般生活を指導するといふことから考へて、是等の種々な性質の上に基礎を置いて、そこに我々の教育の理想をもう一段と反省した行き方をすべきものであると思ふのである。特に實習指導に關係のある方面としての今の理智性と、それから感情性といふやうな問題について論じて見たいと思ふ。

兒童期の實習指導と青年期の實習指導との間に違ひがなければならない。要するに其のやうな性質があつて、かやうに自我の感が發生し確立して來るからであつて、其處から種々な問題が生れて來る。

先づ第一に理智的傾向であるが、青年時代に就いては、我々が最も目につくのは、子供が生意氣になるといふことである。それから小理窟をいふ、或は批評的になるといふことである。子供の時代は大體いはゞ、專制的な時代であつて、青年時代は非常にデモクラチツクな時代である。先生なんかのいふこともさう偉いと思つてゐない。自分の仲間だと思つてゐれば良いのだけれども、仲間よ

り低いやうに考へてゐる。生徒は先生のことをいふのに、あの先生といふやうなのは上等であつて、誰さんと言ふのは少し良い方で、悪いのになるとあいつといふ。我々の小さい時には皆呼び捨にしたものである。何だか自分と同じといふよりも少し目下といふと可笑しいけれども、下手のものの様な氣がしてゐる。さういふ風に生意氣になる。其の生意氣になる、小理窟をいふ、批評的になるといふことの根據は、ものを考へる働きが非常に複雜になる。理智的になるといふことから來てゐるものだといはれてゐる。子供の時代のものの考へ方は、比較的具體的である。ものを説明するにしても、或はものを考へさせるにしても、實際にものを見て、ものに觸れて見て、初めてそれが分るといふ風な性質を持つのである。それであるから子供には直感教授がさういふ意味に於て必要なのである。青年時代になると、それが非常に抽象的になる。或は具體的なものと共に、抽象的なものが分るやうになる。同時に抽象的なことに對して興味を持つのである。例へば子供の時代に我々は人道といふやうなことをいつたとすれば、子供は人道といふことは良く分らぬ。子供にどういふことであるかを、子供に説明させて見ると、それは人間の歩く道といふやうにいふ。青年になるとかなり多くののもが、Humanity といふ意味を示すのである。要するに子供はものを形のあるもの

として考へ易い性質を持つて居るのであるが、青年になると、形のないものを考へるといふ性質を持つて居る。一方は抽象的でなければ、どうも氣が濟まぬといふやうな所がある。

それからもう一つは子供の時代の考へ方、事實的にまた、表面的に考へる。所が青年はそれでは滿足は出來ない。何故電氣が來れば火が點くのであるか、何故抵抗があれば赤くなるかといふやうに窟理を辿つてものを聞いて行かなければ滿足しない。さういふ性質を持つてゐるのである。換言すれば論理的になる性質を持つて居る。是は青年が批評的になることを良く説明してゐる事實なのである。かやうに抽象的になり、論理的になることは、種々な方面の事實に示されて居る。譬へばものを教へるにしても、子供の時代には機械的にものを教へるのであるが、青年になると理窟を以てものを教へるでなくてはならない。例へばよくあるやうな表に對する記憶は、子供の時代には非常にむづかしいものであるが、青年時代になると、それが易いものになる。尋常四年位の子供にやらせて見ると中々覺えるものではない。機械的に筋道を考へさせることなしに覺えさせる方があつてゐるのである。

それから又かやう記憶のやうなものでも抽象的な性質を持つのである。具體的なものと共に抽象

的なものを教へる場合が殖えて來る。聯想卽ち、人にものをいはれて、直ぐに我々の頭に浮んで來るやうな種々なものの觀念などは、抽象的　理論的なのである。人のいつたことに對しても、直ぐ理窟が思ひ浮べられる。それが青年の性質なのである。從つて青年期は、抽象的な一般原理を先づ立てようといふやうなさういふ傾向を持つのである。論理的なものの中心になる一般的の抽象的な性質を持つて居る一般原理を立てようとする。さういふ傾向が見られる譯である。さうして其の上からすべてのものを理窟を押して行かうとする傾向がある。例へば、先生が生徒の點の惡いのを讀み上げたりすると、人格を無視してゐるといふやうな事をいふ。人格を無視するといふことは、先生達が何處かで人格は尊重すべしと教へて來てゐる譯である。かやうな一般原理から、ものを考へようとする傾向を持つ譯である。一寸理窟でないことを大人がいつたならば、直ぐ青年はつきこむ性質を持つて居る。「何が故に」とか「何の目的で」とか「如何にすべきか」といふやうなことを考へて、後に其の事をする性質を持つて居るのであるから、先刻申したやうに、實習等をしても、人を牛や馬と同じやうに心得て居るといふやうなことをいふ。其の意味が分つてゐないのである。其の意味が分つてゐないものであるから、何故に實習をするのかと考へるのが、其の時代の特徵なの

である。是は勿論教育の有無或は男女の差によつても多少異なつて居り、都會の青年と田舍の青年とを比べて見れば、都會の青年の方がより理窟ぽい性質を持つて居り、田舍の青年の方が少いのである。教養の高い人は理窟をいふ性質を持つが、教養の低い人はそれが少い。併し大體に於て斯樣な傾向が青年の一般的な性質として考へられなくてはならない。

尙此の外に大切なことは、感情的になることである。子供では感情に非常に左右され易いものを持つて居るのであるけれども、それは極めて淡いものであつて、泣いても直に御機嫌を良くするやうな性質を持つて居る。喧嘩をして家へわつと泣いて歸る。親が隣の家にねぢこんで行く內に子供が仲良くなつてしまふやうな感情が、子供の感情である。大人になると、所謂分別が付いて來て、感情をさうはつきりと外に現はさないで持つて居るのである。それは長い間の經驗から割出された ことであるが、かういふ所では怒るべきものでない。さういふやうな感情の抑壓が出來るやうな狀態になつて居る譯である。所が子供と大人の中間に位する青年に就いて見ると、非常に感情は强いのであるが、一方に之を抑壓するといふ働きが未だ發達してゐない。そこで强い感情が起きて來るのに、それを抑へる働きがないものであるから、結局非常に激しい感情が現はれて來ざるを得ない

やうな狀態に、青年は置かれて居るのである。例へば青年は嬉ぶと、手を取り躍つて嬉ぶといふやうな風である。運動會の後の光景なんかを見ると宛で躍り上つて嬉んで居る。あれが詰り青年の感情である。大人にはとてもあゝいふ風にはいかない。酒でも呑まなければ……、もう一つは青年なんかの戀愛が危險といふのは盲目になり易いからで、激しいといふ言葉でそれを表はすことが出來るであらうと思ふ。さういふ激しい感情を持つて居る。單に激しいといふばかりではなくして、激しい感情が動くのである。不安定といはふか、或は動搖するといふ風にいつても良いだらうと思ふ。非常に嬉んでゐると思つてゐると、忽ちにして憂鬱な感情の中に捲込まれる性質があるのである。非常に前途に希望を懷いて居ると思ふと、忽ちにして悲觀する傾向がある。非常に勉强して居ると思ふと、直ぐに又怠けやうといふやうな氣持になる。それが中位の所に止つて居ない。我々が實際に生徒に種々なことを言つて聞かせる。生徒は非常に感激して歸つて來る。あれなら大丈夫と思つて居ると二三日經つと復元通りになるといふことになる。さういふやうなのであらう。是は單純に個人として精神が動搖するといふばかりではなく、一つの青年の集團を見てもその傾向がある。一方には一生懸命にやつて居るやうな者があると思ふと、あいつらは馬鹿だといふやうな一團が出來

て來る。それがつまり青年時代の特徴なのである。眞中の所にゐないのである。動搖する性質を持つ。青年自身でも實際をいふとどんな氣持で自分が居るのかといふことが一寸はつきりしないことがある。無茶苦茶な感情の中に悶へてゐるといふことがある。是は偉い人でも矢張りさういふ經驗を持つてゐることが多い。例へばトルストイは一八四三年にカザンの大學に大入つて勉强したしかもその當時は毎日酒を飲んだりして大變な生活をしてゐた、かやうに一方では非常にデカタンな生活をしてゐたのであるが、其の頃の日記を見ると非常にピューリタン Puritan のやうな考を持つて居るのである。人間完成の頂點は自分は何も知らないことを會得することであるなどと書いてある。だから唯其のピューリタンな傾向が强くなつて來るに從つて、人間は偉くなるといふだけのものであつて、人が惡い事をしたからといつて其の人全體を惡者であるかの如く考へたら大きな間違であつて、それは一方には惡いことをする精神があるのではあるが、一方にはそれと反對に道德的な氣持が保つてゐることは、我々は何時も考へて居る必要があると思ふ。兎に角不安定なのである。それは個人的であるといふばかりでなくして、グループ即ち集團としてもさういふ感情の對立を持つて居るのである。然も又不安定であるといふのみでなくして、青年期はさういふ心持のうちでもど

うも否定的な傾向が強いのである。ものを見ても、それは人の厚意をなるべく認めまいとする。或は自分の將來に對しても悲觀的な氣持が強い。自分を肯定するといふよりも劣等視するといふやうな氣持を持ち易いといふ性質があるのである。

一般からいつて青年は大體かやうな性質を持つて居るのであるが、かやうな性質も青年の境遇なり、或は青年の教育によつて餘程違ふ。殊に都會のやうな刺戟の多い處に成長すると、感情の激しさ並びに不安定傾向が一層強いのであつて、刺戟の少い處では、此の傾向が割合に少い。

それからもう一つ注意すべきことは、かういふやうな傾向は大體に於て十七歳を境にして、十七歳より以前は比較的さういふ傾向が強い。ピューラーなんかは十七歳より以後にはかういふ、どつちかといふと肯定的な傾向が強いといふやうにいつてゐる。中學四五年といふやうな時代は、最も取扱にくい時代であつて、それから以後になると、稍々落付が出來て割合に取扱ひ易い時代になつて來る。

上述のやうに、兎に角青年は理論的な傾向が強くて、ものを一般的な原理的に考へようとする性質を持つて居る。青年はすべてが感情的であつて、非常に動き易い。それから否定的な動き易い激

しい感情を持つて居るのであるが、それをもう少し具體的な形として考へたものが、前述の自我或は自我感情の發生なのである。小さい子供は自分に所謂自我がはつきりして居らない。私とかあなたとかいつても、さやうな區別がはつきりしないのであるが、年齢が經つと、子供には所謂自衛の本能があるのであるから、意志とか、或は其外自分の滿足とかいふやうなことによつて自分といふものの觀念が割合に現はれて來るやうになる。學者によると、食慾等の爲に自我の感情が明確になり殆めるのであるといふやうなことをいふ。かやう自我感情を強めるもの、もう一つのものは、所有の慾望から出て來る自分といふ觀念である。稍々大きくなると社會的な關係を子供が持つやうになつて、お友達とか親とか兄弟等の他の人々と社會的な關係を持つやうになり、自他の區別が明かになつて來るのである。青年期になると、具體的なものから抽象的なものへ段々自分の領界が擴がつてくる。さういふやうな譯で、自分を守るといふやうなことでも、所有といふやうなことでも、社會的なことでも、すべて具體的な事から、段々抽象的な事へ向つて來る性質を持つて居る。例へば名譽といふことの意味は、子供には眞に了解されないのであるが、青年時代となると抽象的なことの諒解を持つやうになるから、はつきり是がわかつて來るわけであるのみならず、其處に尙青年の

身體活動の擴張といふやうなことがあつて、其の爲に强い自我の感情が發達して來るのである。かやうに青年には自我が發達して來る時代に居るのであるが、一方には道德教育なんかで、自分といふものを强く認めさせようといふような教育をやつて居る譯であるから、自他の區別、自分と社會との關係といふやうなことから、所謂自我感情が一層强められるといふ結果になつて來る譯である。

青年は自分を主張し自分を中心として自分を守らなければならないといふやうな氣持に、自然ならざるを得ない譯なのである。今日の狀態はさういふものを扶けて居るのですから自我が發達し、自分を守るといふやうな精神が著しく發達して來るやうになるのである。そこで自分の生活を强くするやうなことが、或は自分の重んぜられること、尊重せられること、或は自分に委せられること、さやうなことに對して著しく悅ぶやうな性質を持つて來る譯である。それと反對に干涉されることとか、或は自分の人格を蹂躙されることとか、自分と他人とが何等の區別がない仕事とかさういふやうなものを嫌ふやうになる。もう少し具體的にいへば、青年は自分が大衆になるよりは、支配者になりたいといふ意識が强いものである。機械的になるといふことよりも、自分特有の仕事を持つことを好む。單純なることよりは複雜なることを悅ぶといふやうな性質を持つのである。

そこで實習のやうな筋肉的で、精神的な領分の少いものは比較的單調である。それから誰がやつても出來るといふやうな、さういふ人格的要素の少い仕事になると、悅ばない傾向が出て來ることはこれで分るであらうと思ふ。つまり青年は一方に理智的な傾向が發達してくると、一方に感情的な發達が行はれる關係からして、自我の發生が著しく行はれて、自我の意識が强くなるやうな結果を齎して、其の爲に自分を守る意識が强くなつて、自分を中心にしてものを考へ、自分を發見しようとしてものを考へる性質に近くなつて居るのであるからして、實習が一方に於て筋肉の發達によつて實習的訓練をしなくてはならぬのではあるが、それと共にもう一方にかやうな傾向に考慮をしないと、本當の訓練にならないといふ所がありはしないかと思ふのである。

4　青年期の身體並に體力

所謂實習といはれて居るやうな勞働の能力、或は勞働に對する抵抗力を養ふ爲には、精神的なものの外に、筋肉の發達或は體力の發達等が關係があるのであるから、此の點からいかに身體或は體力が發達するかといふことを實習指導との關係から考へるべきものがありはしまいかと考へるのである。併しそれはそれとして、之を一方からいへば、青年時代は所謂自覺の時代であるから、自分の身體に就いて知るといふばかりでなく、それに出發して自覺的に筋肉作用の傾向或は筋肉を練習する傾向を培ふことが、一つの大切なことではないかと思ふのである。我々が子供の時代から勞働の傾向を馴致することが出來れば、其の自然に培はれた傾向の爲に、青年時代に於ても滑かに働く傾が續くやうになるのであるが、青年時代から勞働を始めることになると、そこにかなり自覺的な要素が必要になつて來て、自分の身體を使ふことがどれだけ自らの發達に、又自らの生活に意味があるかといふことを知らしめることが大切になつて來るのである。

そこで一通り身體の發達に就いて述べ、此の時代の體力が如何に著しい發達を遂げるものであるかを明かにして見たいと思ふ。順序として先づ第一に身體の外形の發達について一通り述べる。

第一表

年齢	身長 (cm)		體重 (kg)	
	男	女	男	女
6– 7	4.6	3.3	1.5	1.4
7– 8	4.6	4.0	1.6	1.8
8– 9	4.5	4.2	2.0	1.7
9–10	3.3	5.2	1.8	2.2
10–11	3.5	5.3	2.2	2.9
11–12	5.2	6.1	2.3	3.5
12–13	6.4	5.3	3.9	4.4
13–14	5.5	2.6	5.3	2.6
14–15	4.8	2.0	3.2	2.9
15–16	4.8	2.3	4.0	(3.1)
16–17	2.8	(-2.6)	3.9	(1.6)

第一表は此の外形的發達を示す爲に、其の一年間にいかなる發育が見られるかと考へたものである。

身體の發達に於て先づ第一に考へられるのは身長並に體重である。かやうな身體の發達は大體兒童期といはれる間に一度落付く所があるのである。例へば身長に於ては、七八九歳位迄は或る程度に發達を遂げるけれども、此處に一つ發達の停滯が見られる。女子ではもう少し早く發達の止る所が見られる。青年時代になると、再び急激な發達を示すやうになる。

此の身長なるものは吉田博士の體力測定によると抵抗力とか或は疾病に對する抵抗力等には關係

はないのであるが、運動能力の大きいこと、筋力の大なることを示すものとされてゐる。身長の大きいことは筋力が大きいといふことを示すのであるから、青年期のかういふ著しい發達、或は青年期に入る前の急激な發達の狀態は要するに運動能力の增長といふことを示し、筋力の增長といふものを示すものだといふことが出來る。重體の問題を取つて見ても、十二から十六歲位の間に割合に體重の增大が著しいのである。此の體重の增大といふことは一方では脂肪過多といふやうなことがあるけれど、身體の橫幅の大きいことを示し、發育の良好なことを示すと共に、榮養が良いとか或は身體の充實といふやうなことを示すものである。從つて體重は少いことは發育の不良を示して居るし、疾病或は異狀の一つの徵候として考へられて居るのである。是も亦青年期の急激な發達は要するに、身體の充實といふことを意味して居るものと考へることが出來はしないかと思ふのである。

かやうにして一般的の身體の發達は、青年期の發達の極く大さつぱな點を示して居るのであるが、今外形的な發達から外れて、身體各部の發達或は體力の發達に就いて見ると、一層青年期が著しい身體の發達の時期であることを我々に知らしめるものがある。

上述のやうに、身長の發達は筋肉の發達を較々示してゐるものであるが、それより尙一層我々に

推定され易いものは、身長の發達に關係した骨の發達である。骨の發達は此の青年期の十四五歲位迄の間に大體生れた時の四倍位になるのであるが、青年期に入つた一年乃二年の間にそれが五倍になるのである。青年期に入つて骨の發達といふものはかなり著しいのであつて、殊に足の長さが非常に長くなるといふやうな測定の結果を見るのである。青年時代になると非常に足が長くなつてスラ〳〵と大きくなつて行くのが見えるといふのは其の關係である。

此の骨の發達と並んで發達するものが筋肉の發達である。身長が大きくなることは一面骨の長さが大きくなることであり體重が大きくなることは身體の充實を意味するものであるから、青年時代の身長なり、體重の發達といふことは、筋肉の發達に相當に重要な關係があることは推定に難くないのである。

フイヤオールトによると、幼時の筋肉の重さは全體重の二三・四%といふ、普通の幼兒の體重七八〇瓦位しかない。是が十五歲位になると、全體重の三二・六%になるのであつて、それから推定した全體の筋肉の重さを考へて見ると、それが八四五〇瓦位になる。然るに是が十五歲から十六歲に移る青年期に入つて殖える分量は非常に多いのであつて、俄に約半分、四四・二%になる、之を全

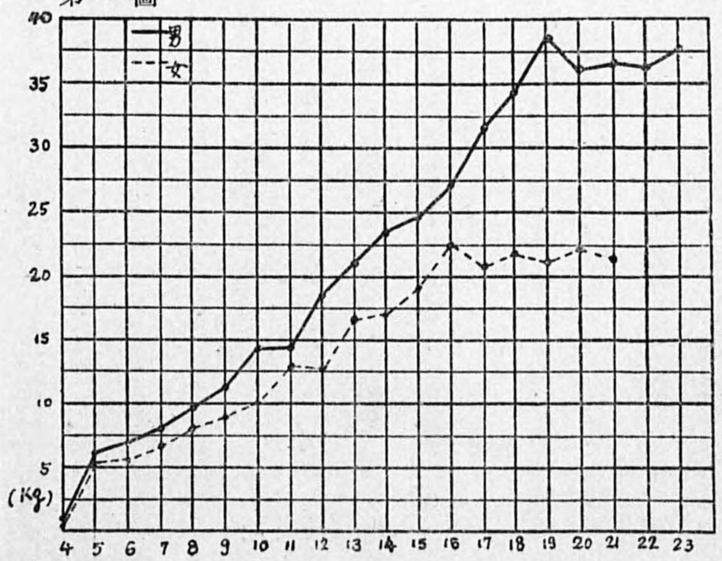
體の體重から考へて見ますと、約三千瓦の增加を見るのであつて、非常に著しい筋肉の發達が此の時代に行はれることを、我々は知ることが出來る。此の時は當然其の筋肉の發達を豫想させる譯である。

（第二表）

年齡	增加量 (kg) 男	女
5- 6	3	
6- 7	5	
7- 8	6	
8- 9	6	3
9-10	3	3
10-11	4	4
11-12	4	4
12-13	11	4
13-14	9	4
14-15	15	4
15-16	15	6
16-17	8	6
17-18	7	4
18-19	13	4
19-20	9	5
21-23	6	4
23-25	1	2

第二表は、ケトレー氏が自分で持上げることが出來る重さを澤山の人類に就いて測つて見て其の一年の增加如何を示したものである。之を部分的手の握力を調べて見ても大體第一圖のやうに十一

第一圖



二歲頃から急激な發達を遂げてゐるのである。青年期は骨と筋肉との發育が非常に著しい時代であるといふに止まらず、各々の筋力が著しい發達をするのであつて、筋肉の活動に對して十分な準備が出來て居る時代であるといふことが出來はしないかと思ふのである。

そこで實習の問題にかへつて見るに、實習は要するに體力を使ふことなのであるから、體力のない者に對して使へといふことは出來ないのである。此の時代は最も體力の發達する時代なのであるから、其の上に於て實習の能力の基礎が出來てゐると言つてよいのである。だから青年は筋肉の働を使はなければ生活し得ないのである。スポーツ等に熱中するとか、同じ飛降るにしても我々ならば靜かに降りるけれども、青年はポンと飛降りる。そこに筋肉の發達が、非常に强い刺戟を要求して居ることが見られるのである。併し彼等自身がかやうな事に對して自覺はしてはゐないのであるから、さういふ意味に於て筋肉の發達に對する自覺を養ふといふことは、青年の性狀から見て勞働に對する意力を養ふといふことになりはしまいかと思ふのである。

筋肉に次いで青年期に於ける發達の著しいものに、內臟の諸器官のそれがある。先づ肺臟に就いて見るが、十三四歲つまり青年期に入る少し前、或は青年期に入つては、非常に急激な發達を見る

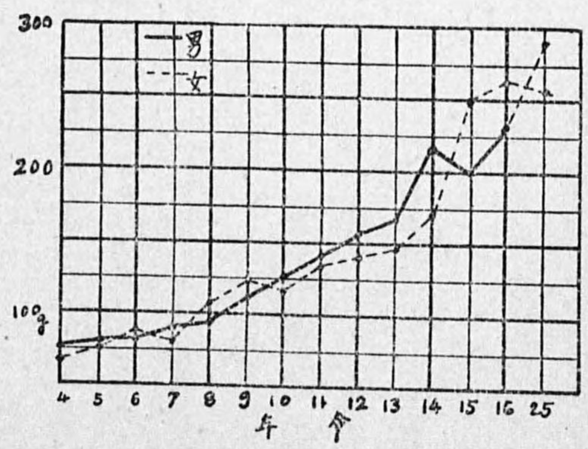
のである。

（第三表）

年齢	女 肺活量(kg)	女 増加	男 肺活量(kg)	男 増加
9	1325		1600	
10	1450	125	1650	150
11	1600	150	1800	150
12	1750	150	1950	150
13	1925	175	2200	150
14	2100	175	2450	250
15	2225	125	2800	350
16	2300	75	3300	350
17	2350	50	3575	275
18	2425	75	3850	275
19	2500	75	3825	25
20	2500	50	3825	0

運動に必要なものは筋肉であるけれども、それと同時に肺臓であるとか、心臓とか云ふものが當然發達しなくてはならぬ譯であるが、さういふものが今申したやうな勢に從つて殖えて行くのである。隨つて肺臓の働を見ても、そこに餘程それと相似

第二圖



た發達を知るものがある。第三表は肺活量發達の狀態を記したものである、此方の方は少いのであるが、此の時代が特に著しいことは直ぐ分るであらうと思ふ。

心臓に就いて見ると、第二圖を見るやうに十四歳十五歳、此の間に非常に著しい發達が行はれるのである。新生兒の心臓の大きさといふものを標準にすると、六歳では心臓の重さが新生兒の四乃至五倍と云ふ大きさになる。それが十二歳になる迄に七倍に達して、それが十六歳或は十七歳位に達する迄に十倍乃至十二倍になるのである。其の發育の狀態を見ると、青年期に入つての發育期が非常に著しいものがみられる。

青年の身體的な發達はかやうに其の外形の發達を見ても、多少內部に入つて筋肉の發達竝に筋力の發達を見ても、それに應對すべき內臓諸器官の發達竝に其の機能の發達を見ても、何れも兎に角運動に對して非常に活動すべき準備が十分に出來て居ると見るべきものを持つて居るのである。隨つて此の時代を通じて前述したやうな勞働的な訓練をすることは、最も有効であることが示されて居る譯である。(勿論かういふ著しい發達の時期に過度に使ふと疾病を起すとか、異常狀態になるといふことは考へてしなければならないことであるが) 此の時代にこそ勞働的訓練が有効に行はれる

ことの出來る時代であるから、そこでかう云ふ自然の狀態に卽して、實習指導をすべきであるといはなくてはならぬであらうと思ふ。唯併し此の自然の狀態に卽して圓滑に且つ十分な效果をあげる爲には、尙外の一面が考へられなくてはならないのである。

5　青年期の理智性と實習指導の問題

次に青年時代の理智性といふことから、實習指導の問題をもう一度考へて見たいと思ふ。身體のことは要するに青年自身に向つて其の發達の狀態を知らしめて、自分自身の身體の保護に任ずると共に今こそ其の動く傾向を養ふ、卽ち勞働の勞力を養ふ時であるといふことを自覺させるといふことに、多少の役立を持ちはしないかと考へ、次に青年期の理智的傾向と實習指導の問題とを考察することにする。青年期は理智的傾向の强い時代であつて、智的に複雜になつて來、抽象的論理的になる。理窟ぽくなつて一般原理から、ものを考へるといふ傾向が强い。其の上に感情が激しいのであつて、其の爲に前述したやうな、自我を發見するやうな狀態になつて來て、之を固執するやうになつて來るのであるが、是が上述のやうな、身體的には非常な勞働の好機であるのに拘らず、單純に勞働の傾向を馴致するとか、或は單純なる實習の指導だけでは、旨く行かないものを作ることになつて居るのであつて、取扱ひ方によると、甚だしく行かないといふことになる譯なのである。けれども一方から考へると此の理智的傾向とか、自我の發見といふやうなことが、勞働に對して特別

な、言はゞ此の時代でなければ鍛練することが出來ないものを作つてくるといふ點も考へなくてはなるまいと思ふのである。從つて大人の勞働とは違つたものが青年時代にはある。又青年時代でなければ養ふことの出來ない價値のある生活も、其處に潜んでゐるといふやうに考へられるのである。そこで今のやうな事から實習指導といふものを出來るだけ我々が滑かにするといふ風な考から、又一面には青年期だけで出來る實習指導の行き方、換言すれば青年期特有の實習による訓練の問題といふものを二三考へて見たいと思ふのである。

先づ第一には、實習に思想的な背景を與へよといふことである。青年期といふものは抽象的な傾向が出來て來る。又理論的な傾向が生じて來て、さういふことを一面には好む傾向が出て來るのであるが、是が人間に理想が生れる原因になつて居るものであることは既に述べた事である。子供の時代の理想といふものは、極く具體的な又所謂思ひ付きに過ぎないものである。極く幼稚なものでもあり、又一面からいへば非常に具體的なものでもある。青年になると理智的傾向からかなり一般原理を考へるやうになる。從つて一般に人生といふものに就いて疑ふと共に、人生に對する何等かの理想を畫くといふ風になつて來て居る。さうして此の理想が、今度は其の感情的傾向から一種の

情熱を持つて畫かれて居るといはうか、情熱を以て青年の胸に迫つて居るといふ所がある譯である。私は青年期の教育で一番大事なことは青年の理想を鼓吹することにあると思つて居るのである。つまり我々は人間として理想を持つてゐなくてはならないのであるが、それを何時培ふかといへば、それは純眞なる青年時代に於て培はなくてはならぬものである。大人のやうに混濁した意識から來る理想に大したものはない。併し青年は一般原理から人生とは何ぞやといふやうなことを純粹に考へて、自分の理想を考へようとするのですから、本當に此の時代を外しては理想を養ふ時代は再び來ないであらうと考へる。ブルン氏（英吉利）が青年時代に理想を養ふことが出來ないものは一生養ふことが出來ないといふことをいつて居りますが、さういふ意味に於て、我々は青年の教育に於ては理想を鼓吹するといふ點が強くされなくてはならないと思ふのであるが、青年自身からいへば、一方ではさういふ理想を好むと同時に一方では何事も理想から考へようとする。若し理想から考へられないやうなものであれば、それを輕蔑し或はそれを非常に嫌がると云ふ風な傾向を示すのである。其處で實習の勞働のやうなことでも、それに對して何等かの理想的な背景がなくてはならないのではないかと思ふ。換言すれば、良くいふ汗の値とか、勞働の神聖といふやうなことが何時も實

習の背景として考へられて居なければならないと思ふのである。そんなことをいはずに、何も考へずに働けといふことをいふが、それならば何も考へずに働くといふことの哲學を彼等に敎へてやらなければならぬ。それが軈て彼等が大人になつてからの、生活に對する一種の思想背景を與へるものであつて、決して惡いものではないのである。青年は、さういふ何等かの思想的背景があれば、其の考の下に勇んで働くといふ點があらう。さういふ氣分、さういふ態度はまあ青年としては當り前のことであるのであるから、それに對して日常指導する人達の間にも少くともさういふ氣分、さういふ態度が何時も考へられて居る必要がある。而もさういふやうな理想の下に勞働することは要するに青年時代のみに出來得ることなのである。此の時代にかういふ種類の訓練をしないならば、本當の勞働の精神といふやうなものを理解することが出來ないで、其の一生を送らなくてはならぬやうな風にならうかと思はれる。要するに一方では青年の自我の性質からさういふ風に行かなければならぬ。是等は恐らく實習を滑かに行ふといふばかりでなくして、此の理想を培ふ其の事が青年時代に於て特に養はなくてはならぬこととして、我々が注意しなくてはならないかと思ふ。

此の思想的背景を必要とすることは、一種の理智的傾向から來るものであるが、玆にもう一つ理

智的傾向から來るもので、實習の問題に對して一つの忠言があると思ふのであるが、それは仕事に意味を與へよといふことである。青年は仕事を理窟で考へる、理窟のないことは輕蔑するといふやうな點が強いのであるが、勞働のやうなものでも實習のやうなものでも、意味がなければ之を輕蔑するのである。畑を起して鋤を動かすにしても、一體何の意味が、我々の人生に對して鋤を動かすといふことにあるのであらうかといふことを考へるであらうと思ふ。それは一つには思想的背景を與へよといふことなのであるが、そればかりではなくして、何が故にさういふことをやるかといふことを、考へさせてやらなくてはいけない。或は敎へてやらなくてはいけないと思ふのである。一寸一つの勞働、或は一つの働といふものに對しても、其の理窟の上からの意味を敎へてやる。もう少し具體的にいへば、科學的な意味を敎へてやるといふことが必要であると思ふ。勿論分らないこともあるのであつて、分らなくても分らない所に理窟があるのであるから、自分には分らないけれども、一つ考へて見ようといふ風にやらなくてはいけないと思ふ。一つの鋤の形でも苗の植ゑ方でも、それに對して何が故にそれをさうしなくてはならないかといふ理窟を、示してやることが必要であると思ふ。言ひ換へれば、一つの農場の働きに對しても必ずそれに或種の——時には植物學的な

説明もあらう。又時には經濟學的な説明もあらうけれども、何等かの理論を、指示してやると云ふ行き方が非常に必要なものではないかと思ふのである。其處につまり青年の理智的な傾向の滿足があるのであつて、それが又實習を滑かにするものであるのであるけれども、併しそれは單に實習を滑かにして青年をして良く働かしめるといふばかりの効を持つてゐるものではないと思ふのである。其處に一番初めに申しました知識と實習との結合即ち體驗の途が示されて居ると思ふのである。かやうにやることが、實習の行くべき途であつて、さうでなくては、知識は知識、農場の實習は農場の實習といふ分裂した狀態になつて、是は學校を非常に不完全なものにしてしまふのだと思ふのである。所謂從來の徒弟制度といふものは意味を教へない。唯やれ〳〵といふやうな譯である。それで教へて來て居る譯である。實際今の床屋でものを教へる、足袋屋で足袋の縫ひ方を教へるにしても、舊來の徒弟制度を取つて、理窟を知らせないで、唯やれ〳〵と云ふ風にやつて居るのである。其處にこれまでのアプレンチスシステムの特徴があるのであると思ふ。何故一體學校といふものがあつて學校で教へなくてはならないかといへば、それは理窟を教へて理窟と共に實際の仕事を覺えて行くといふ所に使命があるのではないかと思ふ。さういふ風になると、今のやうな知識は知識

として、實習は實習として分裂して居るやうな狀態の實業教育は、實際には何等の意味を持つてゐないものであつて、要するに今青年が要求して居るやうな風に、一つの鋤の動かし方にも其處に矢張り一つの理由を科學的に與へて、其の理由を心得へつつその練習をする所に、今の我々の言ふ實業學校の意味があると思ふのである。此の點は、今日私共の十分考へなくてはならないことゝ信ずるのである。

次に青年の心持の上から、實習の指導上考へられることは、青年の自我を認めよといふことである。今迄述べて來たのは、單に青年の理智的な傾向から考へられる問題なのであるが、さういふことから當然出て來る自我の發生といふ方面から、考へなくてはならないことが多少あるやうに思ふのである。最近私は或る實務に從事して居る青年達に就いて、其の最も嫌といふことと、最も嬉しいことを調べて見たのであるが、其の中で一番多いものの五六を擧げると、最も嫌なことは時間外執務である。それから干渉されること、官僚的であること、著しい拘束、强制的なこと、自尊心を傷けること、單純なる機械的な仕事といふやうなものが擧げられて居る。其の反對に嬉しいことといふものの中には、公平であるといふこと、責任を持たせること、個人の能力の活用の範圍を擴め

る、信頼して仕事を委せること等が擧げられて居る。是は實務に從事して居る人達であるからさういふやうなものが擧げられて來る譯であるが、かやうなものを見ても、何れも自我の尊重といふことに關係した問題を、其處に大部分のものとして含んで居る譯である。斯樣なことは實務の問題としても考ふべきものがあるのではないかと思ふのである。

先づ第一に責任を持たして干渉しないことが實習の一つの必要な條件になりはしないかと思ふ。それから其の責任の中で、青年の能力を活用する、即ち自我の表現を出來るだけ許してゆくといふやうな場面、或は工夫をすることの許される場面、もう少し進んで言へば、青年の自我の表現を許してゆく場面が必要ではないかと思ふのである。是は現在行はれて居る個人擔任の實習場の、自然の起りであると思ふが、實際にさういふことをやつて居る生徒なんかに聞いて見ても、恐らくそれが一番面白いと云ふ風に感じて居るのであらうと思ふ。是は青年の心理狀態から來てさうでなくてはならないのである、勿論全體の實習がさういふやうには出來ない、又すべきものでもないのでありませうが、併し少くとも其の一部分は自己擔任を作つて、自分の設計により思ふ範圍に於て自分の好きな作物を作る。其の栽培するに於てもすべて責任を負ひ、工夫し研究し、又經濟的な調査と

Home Project
School Project

いはうか、其の經濟的な一種の計算といふやうなことをさせてやつたならば、青年が眞に自發的に設計し、工夫し努力するのではないかと考へるのである。今日行つて居るやうな、個人擔任の農場制度といふやうなものにも、尙一層の個人の自發性を重んじ個性に卽してやる。そして其の農場といふものが責任農場でも經營されるやうになつたり、或は家庭で自分の畑を澤山持つてゐれば、それを工夫して經營して其の成績を學校で良く見てやるといふやうな個人自身が自分の生活を中心にして營むやうな、言ひ換へれば、青年期の自我の發現に對して十分なる滿足を與へるやうな實習の遣方が實習を滑かにやつて行く上に於て必要ではないかと思ふのである。併しさういふことは單純に圓滑にするといふばかりではないのであつて、それが其の人間自身を訓練しようし、又工夫創造の訓練もしようし、又自分に任せられた責任に對する努力をする訓練にもなるのであつて、他の學科の指導に求めることの出來ない、或は求めることが出來ても割合にできることの少い重要な訓練、重要な價値を其處に求めることが出來るのであつて、我々は教育の上からさう云ふやうな實習指導の方向をとるべきではないかと思ふのである。

6 結尾

以上は私が青年の生活から見て、實習指導の行くべき道について、考へた重なる二三のものであるが、之を要するに我々は青年の特性から要求されることを考へて、其の中で我々が教育の理想として考へて居る方向へ向くやうな傾向を持つて居る者は之を認めて、それを指導して實習の訓練をして行くといふことになるのである。

之を一般にいへば青年の教育でも、子供の教育でもさやうであつて、青年の心情なり、或は子供の心情を無視して、而して其の無視したことに唯計畫を立ててやれ〳〵といふやうなことをいつてやるといふことは迚も駄目であらうと思ふ。矢張り出來るだけ我々は青年の生活を考へて、或は青年に止らず農場の生徒の生活を考へて、其の生徒の自然の性質性情の上で、是は伸びるべきものである、是はもう少しどうかすればきつと良くなるであらうといふやうなことを見付けて、それで其の軌道の上に乘つて實習を指導して行き、我々の理想的立場から、それを訓練して行くといふことになれば自然の道に從つて、我々の思つて居るものに向いて行くであらうと思ふ。青年期といふも

のはすでに述べたやうに筋力、體力の發達する時期で自然に活動の準備をもつて居るものであるから、若し我々が青年の特性を利用して行くことが出來るならば、立派な實習指導が出來上つて來ると思ふのである。殊に勞働に對する思想的背景といふことは今の社會に於て段々認められつゝある思想であるから、實習に思想的背景を與へて滿足を與へて而して勞働の傾向を馴致し、一方に於ては農業のテクニックを教へて行くには割合に易いものではないかと考へられるのである。

農業教育パンフレット

既刊 1 作業教育概論 東京女子高等師範學校教授 北澤種一

既刊 2 實習指導に就いての心理的考察 東京帝國大學助教授 青木誠四郎

近刊 農業教育論 千葉高等園藝學校長 松井兼吉

近刊 蓄産に關する諸問題 東京帝國大學教授 農學博士 岩住良治

蠶業試驗場について 農林省蠶業試驗場長 農學博士 平塚英吉

果樹園藝 東京帝國大學助教授 農學博士 淺見與七

果樹園藝 京都帝國大學教授 農學博士 菊地秋雄

農業設計 東京帝國大學教授 農學博士 佐藤寛治

農産物の生産增加 農林省農産課長 間部彰

卒業生實地指導に就いて 福島縣岩瀬農學校長 菊地良樹

最近の肥料問題 東京帝國大學教授 農學博士 麻生慶次郎

昭和九年五月三日印刷
昭和九年五月十日發行

（實習指導に就いての心理的考察）
定價二十錢

著者　農業教育研究會

發行兼印刷者　河出靜一郎
東京市日本橋區通三丁目一番地

印刷所　文勝社印刷所
東京市神田區材木町十番地

不許復製

トツレフンパ青敎業叢
2

終